
IS -隊長補佐の憂鬱-

偽桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 隊長補佐の憂鬱 -

【Zコード】

Z5945Y

【作者名】

偽桜

【あらすじ】

「こんな壊れた僕でも、幸せに生きていけるのかな」

これは、少し壊れてしまったオーリ主「御刻 礼衣」がIS世界に転生し、ドイツ軍でゅらゅら生きていくおはなし。

作者が初心者&割と文才がないです。

第一話 プロローグ（前書き）

初投稿です。

テストなので若干短いです。

第一話 プロローグ

…………

ガ…………ガ…………ガガ…………

それは心の削れる音？

ガ…………ガ……………

それは心の最期の叫び。

ガ…………ガ……………

誰かと自分の赤いナースカで染まった体は、もう少しも動かないけれど。

…………ガ…………

ナミダも流せないほど、僕の心は磨り減ってしまったけれど。

それでも、最期に、叫びたい。

それが絶対聞き届けられないとしても。

……イキタイ……

…………

さて、突然で申し訳ないとは思つけれど、僕「御刻 礼衣（みときれい）」は転生者だ。

……オーケイ、その「いい精神病院紹介してあげようか?」みたいな目線にはもうなれているから、怒るなんてことはしない。

でも、実際記憶として頭のなかにあるんだから、仕方無いだろ?~?

前世で普通の高校生として生き、死ぬ直前学校内で殺し……いや、あの時の事はもう思い出したくない。

で、死後何か白髪の老人みたいなのが出てきて、テンプレの如くチート能力を貰つてこの世界『IS』>インフィニット・ストラトスくの世界』に来たつて訳。

因みに貰つた能力は、サブリ無しで『ヴィーグル』に乗れる能力と

全体的な身体能力強化。何か「役に立つ物なら何でもいい」とか言つたらこいつなつた。

…といふか『ヴィーケルエンド』とか、妙にチヨイスが渋い。おかげで生活には苦労しないし。

ま、そういう訳で、今は中学一年生の夏休みである。せっかくの夏休みなので、僕は株取引で手にいれた某航空会社の株主優待券（配当でもらつた）でドイツへ海外旅行をしている訳だ。一人で。

… じつは世界での両親には気味悪がられて中学に入学すると同時に独り暮らしさせられたからなあ まあいいけど。

さて、何で僕がこんな現実逃避みたいな自己紹介を誰かに語つくるかと言つと。

「…………えーと

「…………ふえ」

目の前で突然銀髪眼帯少女が泣き出したからである。いや決して僕が泣かせた訳ではない。簡単に流れを説明すると、

レストラン探しに路地裏に入る

田の前の少女が暴漢に襲われかけているのを田撃

ヴィーグルを使い暴漢排除

少女に話し掛ける

少女泣き出す イマココー！

：訳解らん。

まあ、何か僕の言葉が何かのトリガーになつたみたいだし、取り敢えず事情を聞こいつとしてみる。

「あの、大丈夫？」

「……大丈夫では……ない……」

お、日本語通じた。

「……また……他の隊員に馬鹿にされる……」

『隊員』って事は、何かの組織にでも入つているのだろうか。見た感じ小柄だけど『ひみつきめぐつ』とかする年齢ではないっぽいし。

しばらく事情を聴いてみた所、何とこの少女、原作ヒロインのワウラ・ボーデヴィッシュをやんらしき。まあ見たときからそんな予感はしてたけど。

： 実はエス自体は3巻ぐらいまでしか読んでないんだよな、僕。何か有無を言わせやすいの世界に飛ばされたし。

まあ、大体の事情は理解できた。

ちゅうど今は、ラウラさんが田の改造を行つてスランプに陥つた時と織斑 千冬から鍛えなおされる間らしい。

この様子を見る限り酷いイジメを受けているみたいだな。
なんか今の状況も街での隠密行動の訓練中他の隊員に嵌められてこうなつたみたいだし。

さて、どうしたもんかねえ…？

ま、どーせ助けるぐらいしか選択肢がないんだけど。

第一話 プロローグ（後書き）

初心者なので文も拙いですがよろしくお願いします。
更新はなるべく早めにする予定です。

：ヒロインとかチート能力とか全部AMIDAクジで決めちゃった
のは秘密。

第一話 僕が軍人になった流れとか（前書き）

急展開すぎた。

…すいませんorz

第一話 僕が軍人になった流れとか

まわまわまわまわまわまわまわまわまわ

あかい

まあるいいけの

あかい

まんなかで

ぼくはわらう

ぼくはわらう

そうしたら

めのまえの＊＊が

あかいみずをふいたよ

卷之三

「それでは、御刻 礼衣さん。『シユヴァルツェ・ハーゼ』へようこそ。解らないことがあつたら、気軽に私『クラリッサ・ハルフォーフ』に質問して下さいね」

…どうしてこうなつた？

なんていきなり歓迎の言葉を言われるのか流れが全く理解できない。

特に堅いことではない筈なんだけどな……

自分の身の上を語ったことで少し落ち着いたらしくリカウラと僕は、その後表通りのカフェでケーキを食べていた。

いつも街に出るときは訓練で来ることがほとんどで、あまり外で食べたことのないらしいリカウラは周りをきょろきょろしながらバームクーヘンを頬張っている。

「周囲を警戒しているのは解るけど、ぶつちやけ小動物みたいでかわいい。

「で、リカウラさん

「ムグ…何だ」

何か幸せそうな顔してる。けど、

「やつを語つてた」とつて簡単に話してよかつたの?」

「あつ…

やつぱり…

やつぱりこう言うのって、軍の方から拘束とかされるのかな……。
早く終わるといいけど。

ま、その後当然僕はラウラさんの訓練の監視をしていたらしい人に
取り押さえられ、ドイツ軍に身柄を拘束されてしまった訳で。
身体検査・尋問等々を3日間程やらされた。

ちょっと話をした監視の人に聞いてみると最初は「身元が特定でき
たらすぐ解放しますよー」とか言つてたのに、2日目辺りから「す
いませんもう少し検査させて下さい、お願ひですから!」みたいに
態度が変わった。

…と言つた監視の人自体が軍服から軍服+白衣の研究者っぽい人に
替わつてた気が。

で、それらが終わつた直後、連れ出されていきなり軍服に着替えさ
せられた後いきなりさつきの様な事を言われた、と言つ訳だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「質問してもいいですか」

「はいはい何でしよう、大体の事なら教えてあげますよ。あ、流石に私のスリーサイズとかはちょっと……」

なに言つてんだこの人。

「いえ、そんなどーでもいい質問ではなくてですね……」

「ジーでもいいとか言われた……」

「あー、しゃがんで地面にのの字書いてる余裕あつたら質問に答えてくれません? こっちもツツコミ入れんの面倒なんで。といつか本当になんで只の一般人である僕を部隊に?」

「身体能力・思考能力は遺伝子強化兵並み、しかも体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成されており、更に男性なのにIS適正Aなんてイレギュラーの何処が『一般人』なんですか。そんなこと言う口は塞ぎますよ?」

もうやだこの変態。

しかし、そこまで調べてたのか、ドイツ軍。

多分『体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成』つてのは『ヴィーグル』の副作用だろう。身体能力うんぬんも多分チート関連。しかし、

「IS適正A?」

そう、これは初耳なのだ。

女性にしか扱えないISは、男性には「IS適正：（なし）」を出すはずである。

そんな質問をする僕に、

「私達だって解らなことありますよー」JRCの方が理由を聞かれたごめんなさいです！」

いやそんなキレられても困ります。

しかし、どうやら僕がI.Sを動かせるのは（少なくとも検査上では）本当に動かせるなら僕をI.S部隊に引き込み、駄目でも特殊部隊あたりに配属させるつもり。といふか、

「あ、御刻さんの日本国籍、消しましたから」

…逃げ場が無くなりました。

要はあれだらう、『ドイツ軍に入らなこと国籍無くなるよー』といいたいんだろう。やつきの言葉の所に書いてあつた。

まあどうひたすら、入るしか無いんだもん……

「はいはい、入ればいいんでしょう入れば。ちなみに僕の役職は？」

「あ、役職ではないですかあなたと一緒にいたラウラ・ボーデウイツヒさんとタッグを組むことは決まりましたよ」

まあ、それは予想していた。

片や『落ちこぼれ』、もう片方は『いきなり飛び込んできたイレギュラー（しかも男性）』である。

タッグにして隔離するのは考え方としては順当だらう。

「と、いう訳で、改めまして『シュヴァルツ・ハーゼ』よつじょ、御刻 札衣さん」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その日の午後。

僕は本当にEISを動かせるかどうかを試すため、EISの倉庫に来ていた。

「…えーと

多くのドイツ軍関係者が見守る中、黒いE-15（量産型らしい）。名前
忘れた（）に触れる。

触れた途端流れ出てきたモノは、

あか

あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあ朱あか
あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあか

「グ……え……アう……」

いやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ
嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ

みんなが「なにか」いつているのがおかしい

めのまえの朱があるくオチテそこからみどりの根がトンデ青がの
ぼった

…… そうか、ぼくはけっこうく

＊＊＊＊＊ なんだ。

「グ...え...ア...う...」

ISに触れ、装着された途端、いきなりミトキが苦しみ出したのを見て、それを見ていた人々は騒ぎ始めた。

しかし、騒ぐだけで誰も近寄る人はいない。

ミトキから発せられる雰囲気が、あまりにも異常狂氣じみていただつたからだ。

眼の焦点は全くあつておらず、息も荒い。

そして、何よりも小声で発せられている言葉があまりにも狂つていた。

不意に、そんなミトキの姿が自分に重なつた。

周りからは奇異の目で見られ、誰も近寄ることのない、その姿が。

そうか、この人も『ヒトリ』なんだな、と。

そう、思つてしまつた。

なら、助けてあげなければ。

だから、周りの皆は助けようとはしない。私にそうした様に。

だから、これは偽善。

自分が彼を助けたら彼も自分のことを助けてくれるかもしれないといつ、そんな思考の結果。

そう自分に言い聞かせ、私は一歩を踏み出した。

=====break shift

壊れかけた自分の思考を引き戻したのは、小さな温かさだった。

その原因を探そうと目線を下に送ると、僕のことを抱きしめてくれる小さなラウフとの姿。

抱きしめ方は、まるで壊れ物を扱つよう。

不意に、自分がラウラさんを助けた時のこと思い出した。

4人ぐらいの暴漢に立ちむかおうとしていたその姿は、どこか諦めたような眼をしていた。

『どうせ助けは来ない』と。

結局、僕がラウラさんを助けたのは、ただの自己満足とか同情みたいなものだったのかもしれない。

でも、今度は僕がラウラさんに助けられた。

こんな狂つたような僕を。

そのとき、僕はこの世界で初めて、心から温かいという感覚を実感できた。

第一話 僕が軍人になった流れとか（後書き）

感想・意見等お待ちしております。

第三話 入隊初日（前書き）

今更になつて一話の前書きに誤字を見つけるという致命的なミス。

rz

相変わらず微妙な文章です。

第二話 入隊初日

~~~~~

「なあ」

「ん？」

「来週授業参観だよな」

「セツだね」

「面倒くせえよな、高校一年生にもなつて何を親に見せるんだよ。  
どうにかなんいかね」

「今回で最後になるよ」

「はっ、高校一年生でもやる筈だろっ！」

「いいから、来週を楽しみに待てばいいこと黙つよ」

????????まだ何も終わっていない時の一幕

…………

僕がI-Sを暴走させかけた事件から、一週間経った。

事件後一応行つた動作テストではI-Sを動かせたはいいものの、ドイツとしても僕としてもあのよつた事を毎回起こされたのではたまつたものではないので、もう一度一週間かけて身体中を検査させられ、精神鑑定等々も受けた。

しかし、結果は『全く異常なし』。

原因が解らないのではどうしようもないの、結果あの時に僕を救つてくれたラウラさんが僕の監視役兼バディとして就くことが確定しただけになつたらしい。ちなみに僕はラウラさんの補佐兼バディ。

そんなこんなで、実は今日がシュヴァルツェ・ハーゼでの初仕事だつたりもする。ついでに今日から軍の宿舎へ正式に住むことになった。日本からの荷物の移動は全部やつてくれたみたいで、とても有難い。今日は訓練だけらしいので、『初仕事』といつてもそこまで感慨があるわけではない。検査終わつてからずっと自主トレしてたし。

…………一度、暇だったのでヴィーグル使って自衛トラップだらけの軍施設の屋上飛び回った時はかなり驚かれたな……あれやつた後

ラウラは『あがが入隊したての元民間人の動きだと?』じゃあ私はなんだ!』とか軽く落ち込んでたし。研究者の人たちも『あのセキュリティ網を突破しただと?それが私たちの限界だと言つか!』とか頭を抱えてた。

あ、ちなみに『現時点で世界唯一の男性IIS操縦者の監視役』という大役を任せられたラウラは、周囲からも一目置かれる、というか手を出しにくい状態になり、イジメはなくなつたらしい。「次は実力でも他の奴らを見返してやる」って気合を入れていた。その様子がかわいかつたので、つい撫でてしまつたら赤面して殴つてきた。まあ避けたけど。

そんな日の朝、ラウラさんと僕が朝食を食べていると。

「なあ」

「何、ラウラさん?」

「その『さん』付けは止めてくれないか?一応、今日から正式に私とお前はタッグを組むわけだからな」

「そうするのは別に構わないけど、ならその『お前』呼ばわりもやめてくれないかな、ラウラ」

「ふむ、別に良いだろ。ミートキ」

「あー、名字で呼ぶのはなるべくならやめてほしいんだけど……」

こっちの世界での両親の事を思い出すから。その人達が最後に向けてきた目線は、紛れもなく『バケモノ』を見る目だった。そんなもの、誰も思い出したいとは思わないだろう。

「解った、レイ」

そんな僕の心境を察してくれたのか、ラウラは特に文句も言わず了承してくれた。

あの事件があつてから、すゞぐ、といえる訳でもないがラウラの僕に対する態度は他の人にに対するそれよりも柔らかくなっていた。僕としても気軽に話しかけられるのはラウラだけなので、かなり有り難かつたりもする。

「そついえば、ラウラ

「なんだ?」

「今日の訓練内容って何なの？」

「簡単な基礎体力訓練だけだ、多分な。」

ついでに僕の紹介もする、とのこと。

隊員は全員女性らしい。まあE.S部隊なら当然だが

……『ウラも居るし、心が折れるような事もないだろう、たぶん。

＝＝＝＝＝

ついに来たよ、シュヴァルツェ・ハーゼでの自己紹介タイムが。  
今やつと原作主人公の気持ちが解つた気がしないでもない。

おかしいな、なんで女子が10人程度の前に居るだけなのにこんな  
冷や汗が出るんだろう。

皆さん妙に目が怖いんですけど。『獲物を見る捕食者（性的な意味  
d……ゲフンゲフン）』みたいな。

「えーと、今日からシュヴァルツェ・ハーゼに隊員が一人増えまし

た。彼は『世界唯一の男性IIS操縦者』ですが、このことは機密事項に指定されます。表向きの役職は『ラウラ・ボーデウイッヒ隊員の専属機体整備担当兼アドバイザー』となつてますので、その辺りの詳しい事情等は後でファイルを渡すので良く読んでおいて下さい。

……あ、ちなみに彼の詳細プロフィールが入っている当たりのファイルが一つだけ紛れ込んで『

「何でそんな変なことするんですかクラリッサさん…？」てかそのプロフィールに情報どこから持つてきたんですか！？後輩さん急に目つきを光らせないで！怖いからそれホントに怖いから…

急に雰囲気を変え僕のプロフィールが書いていると思われる紙を取り出そうとするクラリッサさん（何と驚いたことにシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしい。性格に問題がありすぎる気がする）を全力で止める。

何かとっても先行きが不安なんだけど……

「冗談です」

本当か？それにしては目がマジだった気がするんだけど。

「では、御刻 礼衣さん。自己紹介をお願いします」

この雰囲気で自己紹介かい。余計やりにくくなつたよ。  
まあ仕方ないか。

「御刻 礼衣です。さつき『世界唯一の男性IJS操縦者』とか凄そ  
うな紹介をされましたか、偶然そんな特性が見つかっただけの一般  
人ですので、特にそこら辺は気にしなくていいですよ」

「一般人は普通軍施設の屋上を生身で飛び回れるのか…………？」

……「おいらウラ。僕を孤立させたいのかい？」

ほら皆さん「はあ？」とか「そんな身体能力私たちでも持つていな  
いわよ…………？」とかドン引きしているし。

まあ、当然その後の訓練では僕の周りにラウラカクラリッサさん以  
外の人は居なかつた訳で。

……転校デビューならぬ軍隊デビュー、失敗した氣がするなあ  
……。

＝＝＝＝＝＝＝

そんな悲しい訓練終了後。

僕はクラコツサさんに呼び出しを受けていた。

「何の要件でしょうか

一応敬語を使った方がいいらしいのであります。

「宿舎の部屋が決まったのと、明日研究所の方でまた検査があります

す

え、まだ検査するの？もつ調べられる所なんて無いと思つただけど。

「専用機のための適性調査をするのです。一日で終わるらしいの  
でそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

34

ああ、そういうことが。

やつぱりデータ取りのためには専用機は不可欠だつし、どうせな  
ら軍の『切り札』にしたいんだろう。

「『わづこづこ』となのでもちゃんと忘れないよう来てください。後、  
これが部屋の番号と認証用の身分証です。部屋番号は覚えたうすぐ  
に破棄して下さい。これで連絡事項は以上です」

要は自分で行け、と叫ぶことなのだろう。

仕方なく宿舎の指定された部屋の前に行くと、そこには何故か先客が居た。

「あれ、ラウラ?」

「ああ、レイか……」

あれ、何か落ち込んでる。

「何でそんな調子悪そうなの?」

聞いてみると、

「とりあえずこれを見る……」

と、部屋の扉に貼られた紙を見せてきた。

そこには、

『53号室 御刻 礼衣

ラウラ・ボーテウイッヒ

「んやは おたのしみ でしうね b サクラリ

ツサ

クワリッサさあああああああああああん！――――――――――――

## 第三話 入隊初日（後書き）

クラリツサさん変態淑文化。

感想・意見等々待つてます。

## 第四話 朝はあつやつないる（ねーる）（前編）

戦闘シーンまであと少し。  
ヒューバイークル使いもくれる。

あと8000アクセスと1500ヒーラー突破しました。下手な文  
ですが読んで頂き、本当にありがとうございます。

## 第四話 朝にあつそつむじる（ねーょ）

…………

「本当にやるのかい？」

「うん、そのつもりだけど」

「『\*られる前に\*る』なんて愚鈍で理想的な方法、君はやらないと予想していたんだけどな」

「それだけ追い詰められるつてことか。失望した？」

「まさか。むしろ興味をそそられるよ。これだから人間は面白い」

「君も『一応』人間でしょ？何いつてるんだか」

「何百回も『転生』してると、どうしようもなく暇になる物だよ。終いには僕みたいな『人外観察者』になるのがオチだ。」

『そんなものなのかな』

『そんなものぞ、転生者イレギュラーなんて』

僕と彼との下らない遊戯の会話

~~~~~

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ side shift ラウラ

部屋の前に貼つてあつた張り紙についてはレイと一人で見なかつた事にして、もう遅いのでとつと寝よう、といつ話になつたのだが。

「ラウラ」

「何だ」

「なんで裸なの？僕の精神衛生上せめて前は隠して欲しいんだけど

「だが断る」

何でレイの精神衛生に悪いのかが理解できません。

「あー、やっぱりでもここや。おやすみ」

む、流石に『どうでもいい扱い』されるのは心外だぞ。

反論しきりももつてレイは寝てしまったよつので、仕方無く私も寝ることにする。

布団の中で考えていたのだが、私はレイに少し少し思い違いをしていたのかもしない。

ところの、ここ一週間で気がついたのだが、レイが私を見る視線は同類を見るような同情の目だけではなく、どこか『私にあつてレイのは喪われてしまったナニカ』を羨み、私のそれを守ろうとする決意みたいなものが見え隠れしていた。

その『ナニカ』の正体だが、私の知る限りではレイの事を遠ざけた両親に関してぐらうしか思い浮かばない。しかし、私はそもそも両親がいないし、その事に関しては隠す必要もないのでレイには前に話してある。よって違う。

…… そういえば、私が試験管ベビーであると言ったとき、レイは蔑む事なんてせずに『ラウラさんほラウラさんなんだから特に気にならないよ』と言つてくれた。ちょっと嬉しかった気もす・・・げふんげふん。

まあ、その『ナニカ』の正体は全く解らないが、『レイの心の闇は私よりももつと深い』という事だけは感じ取れた。

その上で私に気を遣つてくれているのだから、レイには感謝してもしきれない。

……私が、少しでもレイの心を癒せるのなら、してやりんとな。

====break shift

朝が来た。

『ヴィーグル』を使えば意識のオンオフは割と容易なため、起きた直後でも頭ははっきりしている。

「……あれ」

ふと隣のベッドを見ると、リカはもう居ない。

もう朝食を食べに行つてしまつたのだらうが、と思い、自分も急いで準備しようと布団から起き上がる。

「なんでもいいことあるのセーー？」

「ふあ……？」

僕の布団の中にラウラが居ました。

しかも寝る前と同じ格好、つまり全裸で。自分の顔が赤面していくのが解るので、『ヴィーケル』に乗つて急いで心拍数を調整。

急いで『足』と『手』を『動かし』、急いでベッドの上から降りたところで『身体』を『捻り』ラウラの方向へ向ける。これで一安心だと思ったら、

「あ、れいだ~」

ラウラが素早い動きで抱きついてきた。何とかして抜け出そうとするが、全く身動きがとれない。どうすればいいのか迷つて居ると、ガチャ。

「礼衣さん、そろそろ検査ですので急いだ方が…………あ

あ。

「おつと失礼しました。それでは」ゆづくつづく

バタン。

「クラリツサあああん！誤解ですつてええええええええ！」

II
II
II
II
II
II

「すまなかつた」

朝食を食べに食堂へ歩く最中、やっと頭が起きたらしこうわいせ謝つてきた。

「いや寝ぼけただけだらうし別に気にしてないけどさ、なんで僕の布団に入つてたの？」

「それが解らんのだ」

「いや解りないな。どうして二つ」とか。まさか寝ぼけたとか言わないよね?」

「レイが私を自分のベッドに連れ込んだのでは無ければ、寝ぼけたぐらいしか可能性が無いのだが」

「マジですか

まあいいナビ。

「そういえば、レイも今日適正検査なんだろう？」

「うん、そうだけど・・・ってレイ』も『って事は、ラウラも検査するの？」

といふかまだ専用機無かったのか。

「そのようだ、仮にもレイは私の専属機体整備担当と云ふことになつてゐるからな。専用機がないと怪しまれる」

ああ、そういうことか。

その後も他愛のない雑談を一人でしながら朝食を取り、施設内のI-S専門研究所に一緒に行つた。

……なんかその様子を見た一部から「新入りの御刻 礼衣隊員

とラウラ・ボーデウイッヒ隊員が恋仲である「なんて噂が流れ始めたらしい。余り悪い気はしないけど……げふんげふん。

そんなこんなで検査会場。

僕もラウラも身体検査等々は終わっているので、何を検査するのかと話を聞いたところ。

「あ、戦闘傾向のデータ取るからとりあえず一人でテスト専用機使つて戦つてみて」

…………はあ？

第四話 朝はあつやつな（ねーよ）（後編）

戦闘まで行けなかつた・・・・。○
ヴィーサーの機能つてあんな感じで良かつたんでしたつけ?
感想等々お待ちします。
後、もしかしたら明日といつも田は投稿できなにかもせませ。

第五話 模擬戦前（前書き）

戦闘入れなかつた。orz
焦つて書いてしまつた。

第五話 模擬戦前

…………

「ねえ」

「何だい？」

「君は何故いつもここにいるの？学校は？」

「転生する度何回も同じ内容の授業を受けるのは苦痛だと思わないかい？それなら外で暇を潰した方がよっぽど有意義だ」

「そんなものなのかな」

「そんなものだよ、ボクの人生なんて。君も転生すれば解ると思つよ？」

「いや、遠慮しとくよ。何か大変そうだし」

「それは残念」

僕と彼とのいくつかの会話

~~~~~

「では、模擬戦のルールを説明します」

ろくに文句も言えないまま、ラウラと模擬戦をする事になってしまつた。まあデータを取つていないものといえばこれぐらいしかないので、仕方ないのだが。

「シールドエネルギーの初期値は両者共に600、武装は適当に詰め込.....格納領域に様々な種類のものが入つていいので、自分で自由に」

「今絶対に『適当に詰め込んだ』って言いかかけましたよねえー？」

「氣のせいです」

嘘だ。

「氣のせいだわ」

え、ラウラには聞こえてなかつたの？もしかして幻聴だつたのか？

「あとデータの収集がメインですので、なるべく激しい戦闘は控えてください。質問はありますか？」

「「いえ」」

ラウラとハモつた。割と嬉しい。

＝＝＝＝＝＝＝

そんなわけで模擬戦である。今現在、僕は知らないうちに用意されていた僕専用のIJS-スースを着て、ドイツ軍がチューンしたラファール（なんか全体的に色が黒い以外は見た目に違いがない）を装備している。

そして目の前には今日の模擬戦の対戦相手であるラウラが、緊張した面持ちで同じ型のラファールに身を包んでいる。

「それでは、40秒後にブザーが鳴つたら戦闘を開始してください」

オープンチャンネルでのアナウンスが入つたので、僕も『ヴィークル』に乗り、戦闘準備を整えることにした。

ちなみに僕の『ヴィークル』の操縦席は、いつもは初代ガダムのコックピットみたいな感じである。しかし、ISに乗った時はアシックスみたいな全天周リニアシートみたいな形状に変化する。どうやら『ヴィークル』側でISのシステム関連をうまくシームレス化しているらしく、ハイパー・センサー内で認識している範囲もちゃんと可視化してくれるみたいだ。

ほかにも、『武装一覧』を呼び出してそのまま武器をコールしたり、シールドエネルギーや各武器の残弾数、ISの損傷箇所・損傷レベル等も『ヴィークル』から簡単に確認できる。悪くなつた点と言えば、IS側の生体補助機能のせいで一部の体内物質の分泌量が全く調整できなくなつてしまつた事ぐらいだろう。

以上前の動作テストで確認したこと終わり。

『ヴィークル』の展開が終わり次第速攻で『条件反射』のパネルを開く。

生体時計と照らし合わせながら、ちょうど試合開始と同時に次第『マシンガン』をコールして、右に移動しつつ『目標ラウラ』にオートで照準を合わせ発砲できるようにプログラムする。

プログラミングが終りし、開始まであと15・1925秒となつたとき、ラウラの方から通信が来た。

「レイ

さすがに返答しないのままそこで『戻』を発する。

「なに、『戻』?」

開始まであと7秒。

「本氣で行く」

あと4秒。

「奇遇だね、僕も同じことを思っていたよ」

2秒。

1。

「「それでは、始めよ!」(か)」「

戦闘が、始まつた

## 第五話 模擬戦前（後書き）

感想お待ちしています。

追記

誤字見つけた。修正しました。

## 第六話 模擬戦（前書き）

やつと戦闘入りました。  
かなりテンポ悪いです。

## 第六話 模擬戦

||||||||||||||||||||||||||||

『平和は犠牲の上に成り立つてゐる』といふ言葉は、皆さんも時々耳にする事があるだろう。

無論、日本人のほとんどは『平和』の側に生活している。

さて、その『平和』の中で生きている人の中で、見ず知らずの『犠牲』側の人間をいつも気にして生きている人はどれ程いるだろうか。

……恐らくは極少数しかいないだろう。自分の身の回りにそんな人間がいたら、まず偽善者<sup>嘘つき</sup>だと思っていい。本来そんな事をしていたら、直ぐに精神が狂ってしまう。

その点で彼は非常に不幸だ。なにせ嫌が心にもその存在を知覚しなければいけない所に、自分の平和の下にいる『犠牲』がいたのだから。

……さて、彼はどんな選択をするのか。自分の立場上干渉しないのがもどかしいが、これから非常に楽しくなるだろう。

ある人物の日記から

||||||||||||||||||||||||

戦闘開始と同時に、さつき組んだ『条件反射』が作動。大きく右に移動しながら、ラウラに向けマシンガンを乱射。だが流石に向こうも訓練を受けた軍人である。一瞬こちらの攻撃の早さに驚いたようだが、直ぐに持ち直し被弾を最小限に抑える。そして直ぐにマシンガンで応戦。

少し被弾しながらも回避したのだが、ここで大きな問題が発生した。

「（思考加速も使えないのか、まずいな…………）」

『ヴィーサル』の機能である、思考の高速化が出来ないのだ。多分ISの生体補助機能辺りと干渉したのか、全く稼働しない。当然それがなくても動く事はできるのだが、さらに悪いことにISと『ヴィーサル』の間に僅かな反応の遅延があるせいで、動作のコントロールが難しい。

そのせいで回避した後も更に被弾してしまい、シールドエネルギーがじわじわ削れしていく。

仕方ないので『ヴィーサル』でラウラの武器の向きから弾道を予測、可視化してそれを頼りに回避、攻撃を繰り返す。

しかし、それでもすべて避けきれない。

何か策はないかと『武装一覧』を呼び出すと、一つの案が思い浮かんだ。

直ぐに右手にスナイパーライフル、左手にブレードをホールド。

「レイ、ふざけているのか？」

「『ルハ』でもしないと勝てないと思つて、ね……」

「なつー！？」

ブレードを前方に突きだしながら加速。

流石にこんな単純な攻撃をすると思つていなかつたのか、ラウラは焦つてブレードを呼び出し応戦しようとする。しかし、

「甘いよ」

ラウラがブレードを構えるのを確認し次第、僕は右手のスナイパー・ライフルを構え、目標ラウラに発砲。ラウラのシールドを削つていく。

「不意討ちとは、やつてくれるな…………」

そう言つたラウラが構えたのは、大型の荷電粒子砲。おこひつちに

はそんなの入つてなかつたぞ。

とは言えあれに当たるのは不味いので、射線予測で急いで回避。

しかし、その先にいたのは。

「ラウラーー？」

「せつまのせつま」といつの葉、そのまま返をせてもひつ

いつの間にか移動し、ブレードを構えたラウラだった。急いで回避しようにも、EISの反応が遅いせいで移動できない。仕方ないので左手のブレードで受け止めるが、押しきりられそうになる。

急いで右手のスナイパーライフルを構え、照準を適当に合わせ発射。当てることはできなかつたが、体を離すことには成功したので、急いで体勢を整える。

「よくかわしたな、レイ。それが本当にい最近まで民間人だつた奴の動きか？」

「警めてくれてるのかな、それは

「やうだが？」

「それは嬉しいな、だけど

」

「「容赦はしない」」

二人の言葉が重なると同時に、僕はラウラに向かって突っ込み

「あ、データ採れたんでもういいですよ～」

ガタン。

「「はあ…………？」」

研究者<sup>バカ</sup>の介入によってIRSが停止したせいで、唐突に試合は終わってしまった。

＝＝＝＝＝＝＝

そんな戦闘終了後、まず一人でやつた事は研究者<sup>大バカ</sup>をぶつ飛ばす事だった。

そいつは「すいませんほんの出来心だったんですよ〜るしてくだ<sup>5</sup>ギ  
イアアアアア」何て断末魔をあげていたが、そんなもの僕らの知つたことではない。真剣な戦いを邪魔した罪は重いのだ。

その後、ほかの研究者に個人的な要望（反応の遅さとか思考加速の事とか）を伝え、ラウラと一緒に宿舎に帰ることにした。

「ラウラ」

「何だ」

「さつきの勝負、いつか決着つけよつ」

「そりだな、私もあんな結末では納得できません」

そう言つて笑つラウラ。かわいい。

なでなで。

「ふにゃつー？…………な、撫でるなあー」

「あはは」

顔を真っ赤にして殴つて來たので、僕はラウラに捕まらない程度にゆつくり逃げることにした。

……一方、その様子を見た他の人々は。  
「なにこの甘い雰囲気」と思つたそつな。

＝＝＝＝＝ side shift：ドイツ軍研究者のみなさん

「あの男性操縦者の方からHSの反応が遅いと苦情が來た」

「何？あの実験機は専用機並みに反応が速いはずだが」

「ならどうすればいいんですかー?」

「仕方ないが、『アレ』を使つしかないか……（使いたいだけ）」「

「『アレ』をやるとか、本気ですか？」

「なるべくなら避けたかったが、まあ仕方ない……（ほんとはすげーヤル気）。VTシステムは開発放棄だ。あんなものをダラダラ作り続けるよりも、急いで『アレ』を完成させるぞ！」

「…………了解です…………」

彼らがVTSシステムの開発を全力でスルーしてまで開発しようとしたもの、それは

AMS (Allegory Manipula System) である。

## 第六話 模擬戦（後書き）

弟から「ACFAネタ入れよしづぜ」という毒電波を受信したのでAMS搭載フラグを建てました。でもこれ以上ACFAネタを入れすぎるのはやめます。多分しつこくなるので。

ついでにVTSシステムがどうか逝ってしまった気がするナゾ氣にしません。

……ヴィークルとAMSってかなり相性がいい気がする。

追記：一応用語解説（ravenwood.jp様より転載、一部  
改変）

Allegory Manipulate System 【略称  
: AMS

脳と機械の制御装置を接続し、操作を思考によつて行つと、この次世代型アーマード・コア（ネクスト）の制御方式。  
機械と行つ電気信号でのやり取りを正確に処理できなければならず、使いこなすには先天的な才能（AMS適正）を必要とする。  
接続者の適性が低い場合は非常に大きな負荷がかかり、脳や神経を損傷する可能性がある。元々は身体的欠損を補うための医療技術として研究されていたが、このために民生化できなかつた。  
その操作速度、精密性から次世代型アーマード・コア（ネクスト）の操縦方式として採用される。

この方式でない場合、ネクストの操縦には完全に連携できる数十人のチームが必要になるらしい。

稼動部分を簡略化したりすることで負荷は低くなるようである。逆に精密すぎたり稼働部位が多い装置ほど高いAMS適正を要求されるらしい。

ちなみに本作では、「AMS適正自体は必要ないが、AMS関連のシステムを構築するときには個人にあわせ一つ一つ作る必要がある」という設定にします。

閑話『彼と僕の出会いこと、彼の興味対象が僕になつたワケ』（前書き）

今日は部活で出で立つてるのでテストもかねて予約投稿。  
今回はいつも本編の上に書いてるアレの少し長めバージョンです。

## 『闇話』『彼と僕の出会い』と、彼の興味対象が僕になつたワケ

＝＝＝＝＝ shift : dream

これは、僕がまだ狂う前のおはなし。

彼と初めて出会つたのは、高校の入学式があつた帰り道、公園での事だった。

その頃の僕は『あの事』を理解してしまつたせいでかなりショックを受けていた。

ただでさえ荒んだ視界の中、公園の彼に気がついたのは、全くの偶然だろう。

なにせ彼はただでさえ田立つ筈の銀髪で、更に公園の広場のど真ん中に立つていたにも関わらず、全くと言つていいほど存在感が無かつたのだから。

そんな彼にぎょっとして立ち止くしていると、彼がこちらに気が付いたのか、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

一瞬逃げようとも思つたが、別に逃げる必要性を感じなかつたのでそのまま立ち止まる事にした。

彼は僕の皿の前に立つと、

「いやはや、まさか気付かれるとはね」

と言ひながら笑つた。

「上手く気配を消そうとしたのだけれど」

「なぜ気配を消そうとしたの？」

「なに、ほんの醉狂や。やうした方が僕の趣味がやり易いからね」

「趣味つて？」

「世界の観察。長く生きてみると、そのぐらいしか楽しく思える趣味が無くなるものでね。まあもつとも、これもあまり樂しことは思えないけど」

「『長く生きてゐる』といつて、君は若さを離れてナビへ典型的な中二病かい？」

「中一病とは失礼な。僕は転生者なんだよ」

「はいはい中一病乙」

……そりは言つたものの、その後の話を聞いてみるとそりは思えなくなってきた。

空想の出来事にしては、あまりにも内容が細かすぎる。

結局、

「解つた、信じるよ」

と言わざるを得なくなるまで。

僕が彼に降参した後、彼は

「さて、君の話を聞かせてくれないかい?」

と話を振つてきた。曰く、

「他人の話は、僕にとって最高の暇つぶしだからね」

らしい。

一瞬話そりが迷つたが、さつきの彼の話が本当なら彼に逆らつても

どうしようもないの、僕の話をすることがあります。

＝＝＝＝＝

僕の話を聞いた後、彼は

「興味深いね、君の人生は」

と一言だけ感想（？）を言った。

「久々に面白い事を聞いたよ。ありがとう」

「僕の人生はそんな扱いか……」

まあいいけど。

「明日もここに来てくれないかい？その話の続きをみたい」

「えー……」

流石にそれは嫌だ。こっちの精神が持たない。

「僕なら君を救えると思うけど？」

「なんでそんなことを？」

「なに、暇つぶしを

そんな事を彼は言ったが、じゅうじゅうとしてはなんでもいいからすがりたい気持ちではある。

「なら解った、明日モードに来るよ」

それが、彼と僕の始まりだつた?????????????????

「起きた、レイ」

「ああ、ごめん少し寝てた

少しうたた寝していたら、心配そうな顔をしたラウラに起しそられる。

「どうした？寝ながら泣いていたぞ？」

多分『まだ普通だった頃』の夢を見たからだらうが、僕は寝ている間に泣いていたみたいだ。

……思えば、あの頃は確かに辛かつたし、幸せだったとは言い難いけど、まだ楽しかった。

そしてその日々を経ても、もう戻らないのは解っている。

でも、

「ねえリカワラ、

「何だ？」

「」こんな壊れた僕でも、幸せに生きてこけるのかな

「当然だろ？？レイはレイだ。自分の幸せを見つめられる筈だ。……まあ、何処かの本の受け売りだが」

「ありがとう。それでもすく嬉しいよ」

????????少しぐらうだつたら、甘えてもこいよ。

闇話『彼と僕の出会いこと、彼の興味対象が僕になったワケ』（後書き）

ちなみに作者はこれが投稿される頃に山頂にいます。

感想等お待ちしております。

## 第七話 越界の壁とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）（前書き）

投稿遅れた――！

相変わらずの駄文ですが、皆さんからのアドバイスで少しはマシになつてくるかなーと思つていていたり。

本当にありがとうございます。

## 第七話 越界の瞳とAMS（ドイツ軍変態研究者の本氣）

……………

彼の人生の話は僕の暇を潰すには十分だった。  
いや、本当に興味深いのは彼自身かもしない。

なにせ、彼は自分の下にある『犠牲』に気が付いた上、その『犠牲』  
に無理矢理にでも手をさしのべようとしているのにも関わらず、自  
己の精神を非常に危ないところではあるが安定させつつある。

……………その『犠牲』が本当に救いを求めているかなんて全く気  
にせず。

さて、彼がそのことに気がつき、心の安定が崩れたとき、彼はどん  
な行動をするかな？

非常に楽しみだ。

ある人物の日記より抜粋

「一夏、何をやつていい?」

「おひと誰かと思つたら姉さんか。驚いたよ

「わざわざから後ろにいたんだがな。で、何をしていた?」

「いや、ただの中二病小説を書いていただけさ」

「おまえは何をやつているんだ……。まあいい、風呂が沸いたので先に入つているが」

「はいはい」

「ふう。危うくバレる所だつたよ。まさか『前世で見た面白いものについて色々と纏めてた』なんて言えないからね。さて、『彼』は今どんな様子かな……?」

~~~~~

中途半端に終わつてしまつた模擬戦から一週間後。

僕らには特に何事もなく、クラリッサさんにからかわれながらも一人で訓練を続けていた。

ラウラは頑張つて訓練をしていたおかげで、部隊内の成績ランクでは一番下から上位3分の1に入るまでになつていた。

ちなみにラウラが僕の布団に入ってきたのは最初のあの日だけで、翌日からはちゃんと別の布団で寝ていた。あいかわらず全裸ではあつたが。

……僕？相変わらず孤立してますよ？
ちょっと訓練中張り切って本氣出したりすると毎回ドン引きされま
すから。

そんな日が続いたの朝のこと。
僕とラウラは、

「…………状況説明ぶりーず」

「面倒なのでイヤです」

起きたら何故かドイツ軍の研究部門に拘束されていた。

「いやいや明らかにおかしいでしょこれ。何で僕もラウラも何か手
術台みたいなのに縛られて乗っけられてるんですか？」

「面倒なので以下略」

未だ寝ているラウラが羨ましい。一体どんな状況か誰か説明してくれ
よ…………

「リーダーである私が説明しよー！」

「何か変なキターーー！」

いきなり白いマントとサングラス掛けて格好つけてる良く解らない
女性（多分研究グループのリーダーらしい）が現れた。何で貴女そ

んなノリノリで登場したのとか何時からスタンバイしていたとかいろいろと聞く事はあるが、今の所説明してくれそうなのは彼女一人なので黙つて話を聞くことにする。

「…………他の研究者の方々が『ああまたか』みたいなすっげー疲れきつた顔してる。お疲れ様です。

「突然だが、君達には手術を受けでもううー。」

「本当に突然ですね」

「こうかテンションが高過ぎです、ラウラが起きるでしょうが。

「IJのテンションが素だ、よつて下げる気もない!しかもボーデヴィッヒには事前に事情説明をした上で麻酔で眠らせてあるだけだ!」

「ならいいです」

なんか心読まれた事には突つ込まない。話が進まないし。

「さて肝心の魔改…………手術の事だが」

「今絶対に魔改造つて言いかけましたよね」

まあいいけど。

「まあ簡潔に言つと、君達の専用機のために必要なんだ」

「へー

搭乗者に手術が必要なヒツでどんなだよ。

「君は模擬戦の時、『反応が遅い』といつたらしきな

「ええ

確かに言いましたけど。

「そこで私は考えた、『皮膚通しての通信が遅いなら、脳に配線組んで直接やりとりさせれば良くな?』とー」

「わあいとてもマジドな考え方

てかそれ何かAC4系のAMSに似てないか?」この世界にもACシリーズ自体はあつたし。

「ちなみに参考にした、というかぶつちやけ丸パクリしたのはクラリッサから借りたこのゲームだ。まあ私にはゲームスピード(機体速度的な意味で)が速すぎて全然進められていないがな!」

「もしかしてゲーム下手?」

「うひむひこ黙れ気にしてるんだ私もー。」

似てるとかそういうレベルじゃなくて、まんまACFAでした。^{淑女}とか。あんた何処へ行く気だよ。

「まあそういう訳で、君たちに処置を施す」

「別にいいですけど、具体的にはどんなことを?あと僕が了承した瞬間目がギラギラさせんの怖いのでやめてトセイホントマジ怖いんでお願いですから!」

まつざわこへんていすとつて怖いね。

「チツ仕方ない……内容としてはAM用の脳内回線を作るだけだ。あ、ついでに『越界の瞳』も付けるか?ボーデヴィッシュの瞳をメンテするついでだ」

「どうせ断つても『手が勝手に動いた』とか言ひてやるつもりでしょ……」

「当たり前だ」

いやそんな『キリッ』とかされても。

「と書つかメンテなんてできるんですか?」

「脳内回線を配線するときに、以前のタイプの『越界の瞳』だと一部邪魔になる箇所があるからな。」

いいのかそれ。もう一回『越界の瞳』を搭載し直すんでしょう?

「理論上は可能だからいいんだ。瞳の色は治せない上に、『越界の瞳』^{一ジエ}が本来持っている機能を最大限使うこともできないが、少なくとも制御不能状態からは抜けられるだろう。ただし本当にそうなる

かは一切保証できないがな！」

「ダメじゃん」

本当にこんな人にリーダー任せて大丈夫か？
ドイツ軍よく雇つたな。

「まあいい、とつとと始めるが。」

「いやちよつとまつて「問答無用だ」はい……」

結局無理矢理押し切られる形で麻酔をかけられ、僕は眠りに落ちた。

＝＝＝＝＝

手術が終わり、僕はベッドの上で目覚めた。

話を聞く限り、一人とも手術は成功。

ラウラの『越界の瞳』^{ヴォーダン・オージュ}も、一応機能回復はしたそうだ。

そして僕とラウラの首筋には、AMS接続用の端子が埋め込まれた。

手術前にも少し疑問に感じていたので、なんでラウラにもAMS端子を付けたの、とあの人に聞いてみると、

「手が勝手に動いた」

とドヤ顔をしやがったので、とりあえず投げ飛ばすこととした。

まあ頭を色々いじられたのかも知れないけれど、僕もラウラも無事なので、まあいいかなと妥協することにする。

専用機、楽しみだなあ。
「ウラともちやんと戦いたいし。

第七話 越界の瞳とAMS (ドイツ軍変態研究者の本氣) (後書き)

「意見・感想お待ちしています。」

そして『彼』の原作介入フラグが立つた気がしないでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945y/>

IS -隊長補佐の憂鬱-

2011年11月24日19時48分発行